五条橋の弁慶湯

五条橋

石畳が敷きつめられた五条橋から眺める堀川は、かつては弁慶湯が影を映して、えもいわれぬ風情をかもし出していた。また、弁慶湯の横にある石畳の坂を下りて、共同物揚場から眺める堀川も、なかなかの景色であった。

橋は異なった世界を結びつけるものだ。五条橋は、円頓寺通りと京町通りとをつなぐ橋だ。

円頓寺通りは、いかにも下町という風情が濃厚にたちこめている町である。それに反して京町通り周辺は、上町の感じを強くただよわせている。

五条橋をはさみ、円頓寺界隈の下町の象徴的な建物が弁慶湯であった。弁慶湯と向かいあうような形で対岸に豪壮な高橋邸がそびえていた。高橋邸は、弁慶湯と対峙する上町の象徴的な建物だった。高彦将軍と呼ばれ、米相場で財をなした高橋彦次郎が明治時代に建てた邸宅である。その高橋邸は、堀川を睥睨するかのように坂の上に建っていた。その高橋邸も、取り壊されて消えた。

平成15年11月、五条橋界隈の景観に欠かすことのできない弁慶湯が取り壊された。堀川をはさみ上町と下町の象徴的な建物が、２つとも堀川端から姿を消したことになる。

弁慶湯は、明治の初めから、五条橋の際で営業を続けてきた銭湯だ。昭和６年（1931年）には、改築して、その時代に流行したよろい張りになっていた。五条橋の上を、タオルを入れた風呂桶を持ち、下駄の音も高らかに、よろい張りの建物の弁慶湯に入ってゆく。そんな情景も平成２年からは見られなくなってしまった。

堀川とともに育ってきた弁慶湯も、経営者の櫛田浅雄さんも年老いて、年々老朽化してゆく弁慶湯は見るに忍びない状態だった。櫛田さんは、弁慶湯を取り壊すことを決意された。

弁慶湯のみならず堀川と銭湯とのかかわりは深い。戦前は堀川に架かる橋の際には、軒なみと言ってよいほど銭湯が建っていた。堀川に浮かぶ艀船の人たちが利用したからだ。鵜飼船、木曽船と呼ばれた艀船は、たいていは夫婦で運航していた。船で生活する人たちが、一日の労働の疲れを癒やす場所が銭湯であった。最盛期の昭和7、８年ごろには、年間66,000隻もの船が堀川を上り下りしていた。それらの船で名古屋港から石炭、米、砂糖などが運ばれてきた。陶磁器、綿布などが輸出された。とりわけ五条橋界隈は、瀬戸電の堀川駅があって活気を呈していた。

船で生活する人たちにとって欠かせない存在であった銭湯がしだいに姿を消し、最後の牙城ともいうべき弁慶湯も取り壊されてしまった。

弁慶湯の跡に建てられたマンションと堀川をはさんでマンションがそびえている。それは、この地の歴史と文化を象徴する建物が姿を消して、まったく異なったかたちで姿を現したものだ。

五条橋から東向

今はなき高橋邸

昭和11年の五条橋と弁慶湯（名古屋都市センター蔵）

取り壊されて消えた弁慶湯（平成15年10月撮影　読売新聞提供）